

&lt;会員のひろば&gt;

## 私たちの「協同」

—夏の時代にささやかに行ったもの—

横 啓 巳 子 (千葉県/生活クラブ生協元横須賀準備支部委員長)

生協や農協・漁協以外の協同組合の存在すら知らなかった私が、「協同」という言葉に惹かれるのは、なぜだろう？生活クラブ生協横須賀支部の創設メンバーとして活動した3年間はもちろん私にとっておおきな意味を持つ。しかし、その以前の毎日の暮らしそのものが、「協同」の日々であったことに最近気がついた。

1990年8月、私は横須賀から現在住む船橋に転居するにあたり次のような挨拶状を配った。

こどもの声 せみの声

そして渋滞の車の列とにぎやかな季節です。

夏の苦手な私ですが、ここ三浦海岸・長沢にはこの季節がいちばん似合っていると思います。

私は今年ここで13回目の、そして最後の夏を過ごしております。2人の子を産み、3人を育てた(3人が育った)12年半は、まさに私の人生の夏でした。ふと思いついたことの半分は実行に移し、口をついて出てしまった言葉を後ろから追い掛けるような暮らしぶり、いろいろな方々にさまざまなご迷惑をおかけしたと思います。みなさまからいただいた夏の恵みを秋の実りへと結びつけるにはまだまだ未熟な私です。

若干遠方に移り住むことになりましたが、どうぞこれからもお付き合い下さい。

13年間の感謝をこめて

横須賀市長沢、大手の建設会社が分譲した1200～1300世帯の集合住宅が、京浜急行の駅前にひろがる。品川まで60分、すいかやキャベツの畑にかこまれ、夏にはサーフボードをつんだ車が路にあふれる、近郊型農村地帯。私が暮らしはじめたのは1978年、夫が所属する研究所の移転の伴うもの

だった。分譲マンションの一画が社宅となり、120世帯余りがつぎつぎと入居する。「社宅」に会社の付き合いが悪い意味で持ち込まれると最悪の環境となるが、私達の社宅(私の居た棟)は全くその逆だった。もちろん、そう努力する賢明な人達がいたからであったろう。夫も妻もいわゆる団塊の世代が中心で、子育て真最中。「学生寮のようなたてわり長屋」自負をもって自分たちの住まいをこう呼んだものである。

長屋の暮らをもっと快適にするために積み重ねられる工夫、思いついたことの半分を実行に移す過程は、まさに「協同」の作業であった。発案者が賛同者を得、企画をたて、提案する。実行にあたってはそれぞれの人ができる範囲で役割分担をする。ミニコミ紙の発行、コーラスグループの結成、20世帯の大人も子供も総出のガーデンキャンプ、地域のお寺を会場にしたコンサート、当時はまだ珍しかったフリーマーケット。私達がやっていたことは、ごくごく規模の小さいまごごのようなことだった。「協同」などという言葉をもその時だれかが使えば、みな四方に散ってしまうくらい毎日の暮らしの延長であった。しかし私達のエネルギーは社宅の1棟から7棟全体に、さらに地域へと拡がる。そして以前から住み暮らしている人達との接触を持った時、私は理解した。変えていこうという意志をもって動けば地域も変えることができる、と。生活クラブの準備支部を引き受けた私は、横須賀も変わるかもしれないと思うようになる。そして支部は私の手を離れたが、横須賀は確実に変わりつつある。

協同総研の片隅の会員として「協同」の理論にふれることは、今の私には大きな喜びである。が規模は小さくとも実践の場で味わった充足感を私ははっきり覚えている。「協同」の実践のフィールドと仲間を探す努力もしなくてはならない。